武蔵野日曜聖書講筵

永遠の贖罪、永遠の聖霊、永遠の嗣業

――ヘブル書第９章――

１９８０年11月30日
小池辰雄

贖罪の血　只一たび　永遠の御霊　永遠の贖罪　讃美歌「聖書の扉に」　讃美歌「母の乳房を」
讃美歌「信じ入れば」　讃美歌「地は形なく」　讃美歌「春は野べに」　讃美歌「都の西の」　永遠の嗣業　キリストが私を捉えた　唯一性　讃美歌「羔の血を」　讃美歌「われはシャロンに」
讃美歌「わが主キリストは」　祈り

【ヘブル９】

1 初の契約には礼拝の定めと世に属する聖所とありき。2 設けられたる幕屋あり、前なるを聖所と称え、その中に燈台と案と供えのパンとあり。3 また第二の幕の後ろに至聖所と称うる幕屋あり。4 その中に金の香壇と金にて遍く覆いたる契約の櫃とあり、この中にマナを納れたる金の壺と芽したるアロンの杖と契約の石碑とあり、5 櫃の上に栄光のケルビムありて贖罪所を覆う。これらの物につきては、今一々言うこと能わず、6 此等のもの斯く備わりたれば、祭司たちは常に前なる幕屋に入りて礼拝を行う。7 されど奥なる幕屋には大祭司のみ年に一度おのれと民との過失のために献ぐる血を携えて入るなり。8 之によりて聖霊は前なる幕屋のなお存するあいだ、至聖所に入る道の未だ顕れざるを示し給う。9 この幕屋はその時のために設けられたる比喩なり、之に循いて献げたる供物と犠牲とは、礼拝をなす者の良心を全うすること能わざりき。10 此等はただ食物・飲物さまざまの濯事などに係り、肉に属する定めにして、改革の時まで負わせられたるのみ。

11 然れどキリストは来らんとする善き事の大祭司として来り、手にて造らぬ此の世に属せぬ更に大なる全き幕屋を経て、12 山羊と犢との血を用いず、己が血をもて只一たび至聖所に入りて、永遠の贖罪を終えたまえり。13 もし山羊および牡牛の血、牝牛の灰などを穢れし者にそそぎて其の肉体を潔むることを得ば、14 まして永遠の御霊により瑕なくして己を神に献げ給いしキリストの血は、我らの良心を死にたる行為より潔めて活ける神に事えしめざらんや。15 この故に彼は新しき契約の中保なり。これ初の契約の下に犯したる咎を贖うべき死あるによりて、召されたる者に約束の永遠の嗣業を受けさせ

ん為なり。16それ遺言は必ず遺言者の死を要す。17遺言は遺言者死にてのち始めて効あり、遺言者の生くる間は効なきなり。18この故に初の契約も血なくして立てしにあらず。19モーセ律法に循いて諸般の誡命をすべての民に告げてのち、犢と山羊との血また水と緋色の毛とヒソプとをとりて、書および凡ての民にそそぎて言う、20『これ神の汝らに命じたもう契約の血なり』と。21また同じく幕屋と祭のすべての器とに血をそそげり。22おおよそ律法によれば、万のもの血をもて潔めらる。もし血を流すことなくば、赦さるることなし。23この故に天に在るものに象りたる物は此等にて潔められ、天にある物は此等に勝りたる犠牲をもて潔めらるべきなり。24キリストは真のものに象れる、手にて造りたる聖所に入らず、真の天に入りて今より我等のために神の前にあらわれ給う。25これ大祭司が年ごとに他の物の血をもて聖所に入るごとく、しばしばおのれを献ぐる為にあらず。26もし然らずば世の創より以来しばしば苦難を受け給うべきなり。然れど今、世の季にいたり、己を犠牲となして罪を除かんために一たび現れたまえり。27一たび死ぬることと死にてのち審判を受くることとの人に定まりたる如く、28キリストも亦おおくの人の罪を負わんが為に一たび献げられ、復罪を負うことなく、己を待ち望む者に再び現れて救を得させ給うべし。

●贖罪の血

ヘブル書というのは、これは大変なところです。非常に深い神学を持ってます。今日のところはヘブル書の中でも非常に大事なところで、集会にやって来る人が少なくて惜しい。

1**初の契約には礼拝の定めと世に属する聖所とありき。**

「初めの契約」とは旧約のことです。旧約聖書における贖罪の型をここにまず述べているわけです。これは出エジプト記やレビ記あたりに出てきます。「世に属する聖所」とは人の造った聖所です。

2**設けられたる幕屋あり、前なるを聖所と称え、その中に燈台と案と供えのパンとあり。**3**また第二の幕の後ろに至聖所と称うる幕屋あり。**

神殿は東の方を向いてますが、二重の構造になっています。奥の方が至聖所で、中間に幕がある。

4**その中に金の香壇と金にて遍く覆いたる契約の櫃とあり、**

これは出エジプト記30章に詳しく書いてあります。

この中にマナを納れたる金の壺と芽したるアロンの杖と契約の石碑とあり、

「契約の石碑」はもちろんモーセの十誡のことです。

5**櫃の上に栄光のケルビムありて贖罪所を覆う。**

「贖罪所」というのは「ヒラステリオン」といいますけれども、ケルビムが羽でもって両方から贖罪所を覆っている。

これらの物につきては、今一々言うこと能わず、6此等のもの斯く備わりたれば、祭司たちは常に前なる幕屋に

即ち、聖所の方ですね。

に入りて礼拝を行う。7されど奥なる幕屋

即ち、至聖所のほう、

には大祭司のみ年に一度おのれと民との過失のために献ぐる血を携えて入るなり。

このことはレビ記の16章に細かく書いてある。アザゼルの山羊のことも言っているね。16章1節からずっとありますが、15節あたりから特に。

「15斯してまた民のためなるその罪祭の山羊を宰り、その血を障蔽の幕の内に携えいり、かの牡牛の血をもて為せしごとくその血をもて為し、これを贖罪所の上と贖罪所の前に灑ぎ」（レビ16・15）

云々と、血なまぐさいことをやるんだよな。それから、レビ記の17章4節には、

「4之を集会の幕屋の門に牽ききたりて宰り、エホバの幕屋の前において之をエホバに礼物として献ぐることを為ざる者は血を流せる者と算らるべし。彼は血を流したるなればその民の中より絶たるべきなり。」（レビ17・4）

「血を流す」ということは大変な悪になるわけです。命を奪うことになりますから。「集会の幕屋」というのは神さまとの出会いの幕屋のことです。「集会」という訳がちょっとおかしい。そして、10節から15節までが大事なところです。贖罪の血のことが書いてある。

「10凡そイスラエルの家の人または汝らの中に寄寓る他国の人の中、何の血によらず血を食う者あれば我その血を食う人にわが面をむけて攻めその民の中より之を断ちさるべし。

即ち、殺人で血を流すことは一番の罪悪なんです。

11其は肉の生命は血にあればなり。我汝等がこれを以て汝等の霊魂のために壇の上にて贖罪をなさんために是を汝等に与う血はその中に生命のある故によりて贖罪をなす者なればなり。

これはもう非常に大事な言葉です。キリストの生命は贖罪の血である。罪のうちでは一番大きな罪を、逆に今度は、「キリストが血を流して贖う」ということ。14節に、

14凡の肉の生命はその血にして、是はすなわちその魂たるなり。

血が即ち、魂が宿るようなことを言っているね。

故に我イスラエルの子孫にいえり。なんじらは何の肉の血をもくらうべからず。其は一切の肉の生命はその血なればなり。凡て血をくらうものは絶たる

べし。」（レビ17・10～14）

ところが今度は、キリストは、

「わが肉をくらえ、わが血を飲め」

と言ったでしょ。だから、これは本当に、

「生命を受けとれ」

ということになるわけです。だから、戦争は罪悪の一番恐ろしいものになる。

「血」のことは、今のレビ記と、創世記9章、出エジプト記24章――特に「契約の血」のことが出エジプト記24章3節から8節に出てます――それから、さっきのレビ記17章、民数記略19章。まぁ一応、旧約を読んでおかないとね。

8 **之によりて聖霊は前なる幕屋のなお存するあいだ、至聖所に入る道の未だ顕れざるを示し給う。9 この幕屋はその時のために設けられたる比喩なり、**

「その時のため」というのは、キリストの来臨です。

之に循いて献げたる供物と犠牲とは、礼拝をなす者の良心を全うすること能わざりき。10 此等はただ食物・飲物さまざまの濯事などに係り、肉に属する定めにして、改革の時まで負わせられたるのみ。

「肉に属する、世に属する」

とかいうのは、みんなこれは旧約の事態を言っているので、新約になって本当に霊の世界に入る。宗教的儀式の方です。だけれども、それは型であって、今度は、その実質がキリストでもって来たから、そこで旧約の宗教はアウフヘーベンされる。それは破棄されて満たされるわけです。あるものを「破棄して、捨てて、それを満たす」ことをドイツ語で「アウフヘーベン」（揚棄）といいます。だから、キリストは旧約を成就した。

●只一たび

それで、11節からが大事なわけです。

11 **然れどキリストは来らんとする善き事の大祭司として来り、手にて造らぬ**

今までのは手にて造られた。即ち、10節までは旧約の、手にて造った幕屋の話だ。

此の世に属せぬ更に大なる

肉ではないところの、高次な、

全き幕屋を経て、

この場合の「全き幕屋」というのは十字架のことになるわけです。

12 **山羊と犢との血を用いず、己が血をもて只一たび至聖所に入りて、永遠の贖罪を終えたまえり。**

この9章12節は極めて大事なところです。

「**只一たび**」

というこの言葉はちょっと注目を要する。これは

「エファパックス」

という言葉が使ってある。このギリシア語の「エファパックス」という言葉が新約聖書に4回出ている。そのうちの3回がこのヘブル書で使ってある。7章27節、9章12節と10章10節。割合に珍しい言葉なんです。

「ハパックス」

という言葉もある。これはヘブル書に8回出ている。やはり、「一回」という言葉です。6章4節、9章7節と26節と27節と28節、10章2節、12章26節と27節。だから、ヘブル書というのは

「只一回の書」

と言ってもいいくらい、「只一回」という言葉が出てくる。新約聖書に「ハパックス」と「エファパックス」を混ぜると、12回あるわけです。そのうち11回がヘブル書に出てきている。そういうことが字引に書いてある。要するに、只一回性ということ。十字架が、

「己が血をもて只一たび至聖所に入りて」

と。「至聖所」は十字架ですよ。「永遠の贖罪」と書いてあるでしょ。

また、この「永遠の」という言葉がここに三回、大事な言葉に出てくるから、今日は、

「永遠の贖罪、永遠の聖霊、永遠の嗣業」

と題した。

「永遠」

という言葉は、質的にいうと

「絶対」

ということです。絶対的な贖罪であり、絶対的な聖霊であり、絶対的な嗣業である。時間的にいえば、「永遠」だけれども、質的にいえば、「絶対」ということになる。相対にあらざるもの。漢語というものはいいものだね。非常に味がある。

二千年前にキリストが遂に十字架にかかった。極悪人と自分がなった。罪びとの首にキリストがなった。そして、贖罪してしまった。こういうわけです。罪びとならざるもの、即ち、罪なきもの、羔が、罪あるすべてのもののために代わって、罪を全部背負って、我々の罪は贖われた。

「罪」といったって、我々の何か罪と思ったらいかんですよ、

「我々の罪」

という言葉は。困るんだよ、あの「我々の罪」という言い方は本当は。我々が罪なんだから。

「どれが罪ですか？」

ではない。我々そのものが罪なんだ。

親鸞は、キリスト教に、福音に非常に近い。非常に近いというか、もうほとんど一つと言っていいくらいな信仰の角度です。まぁ日本の坊さんでは、親鸞は非常に私も、好きだと言ったらおかしいけれども。吉川英治の『親鸞』も素晴らしいね。

●永遠の御霊

12 **山羊と犢（こうし）との血を用いず、己が血をもて只（ただ）一たび至聖所に入りて、**

と。こういうところは非常にヘブル書というのははっきり書いてある。

「旧約の宗教ではないぞ。祭司や大祭司がそんなことをやっていたが、そんなことではないんだ」

と。キリストはそいつを自分の血で全部贖ってしまった。我という罪びとを。

それは無くなったんだから無ではないですか。なにが悪いか。無我という。私たちは無我になったんだ。私たちが贖われて――決定的にですよ、いいですか、絶対的に、決定的に、ただ一回――キリストはまた十字架にかかる必要はないんだ。今も現に、二千年前の十字架は我々に今現に、現実として臨んでいる。それが「終末的現実」というんです。そういう現実として我々に今、臨んでいる。これはもう、

「分かるの、分からないの」

ではない。これを

「受けるか、受けないか」

だけです、問題は。

「そういうことがあるの、ないの」

なんて、

「そんなことは俺に関係するか」

なんて言うやつは、そう言っていればいいだけのはなしで、ただ救われないだけのはなしです。

「救われるか、救われないか」

ということは、頭の問題じゃないんだから。全存在的な現実の問題なんだ。全存在的な現実の問題を、無我にしてくださったんだから。それを

「まだ私はそう成りません」

と誰が言うんですか。もう文句ないですよ、この贖罪の力は。力ですよ、これは。観念じゃないです、贖罪というのは。この力――贖罪――罪を贖ったという力を持つものはキリストの他にいないんだから。

そうすると、私は根底的に無我にされた。無我にされたところにはもう聖霊が必ず臨んでくるんだ。それを

「聖霊は何ですか？」

なんて言う必要はない。必ず来るんです。ところが、これが来てないんだ、普通。だから、それは贖罪の十字架という命題を観念的に信じているだけのはなしで、わるくはないけれども、それはダメなんです、観念信仰は。私も永いこと、無教会でそこにいた。偽りではない。いつわりではないけれども、それはまだベールがとれてないんです。

今から30年前に阿蘇でもって手島君と二人であの滝見荘で集会して、そこで御霊が本当に来てしまった。私はしびれて、ぶった倒れてしまった。何かしらんけれども、坐っていたのが飛び上がったそうだ。これは御霊がもう本当に天から来たですよ。ええ。十字架の贖いが――今まで無教会は十字架でもって観念で受けとっていたものが、わるくはなかったけれどもそれはまだ本ものでなかった――今度は本ものになってしまった。だから、御霊に圧倒された。これが永遠の御霊です。14節に「永遠の御霊」という言葉が書いてある。

●永遠の贖罪

永遠の贖罪（あがない）を終えたまえり。

とは愉快な言葉だね。もう終っているよと。過去完了であり、現在完了であり、未来完了であるという。完了している。

これは悟りじゃないですよ。悟りの世界ではない。ただ単純に受けとる世界なんです。無という、無我という境地に悟ろうとしているのが禅宗だよ。

そういう無我をいただいていたら、もうたまらないじゃないですか、ありがたくて。みんな、ありがたくないんですか。そうしたらもうそこで、

「主さま！」

と叫んでごらん。聖霊がたちまち来てしまうから。

これが、私は大好きな句なんです、ここのヘブル書9章12節というのは。

12 **山羊と犢（こうし）との血を用いず、己が血をもて只一（ただ）たび至聖所に入りて、**

十字架にのぼって、

永遠の贖罪（あがない）を終えたまえり。

と。「至聖所」と言ったのは、旧約聖書では神殿の中の幕屋の一番大事な所が至聖所なんです。こいつを言いたくてしょうがないから、「至聖所」と言ったので、

「だけれども、新約の至聖所は十字架でござるぞ」

ということ。いいですね。

13 **もし山羊および牡牛の血、牝牛の灰などを穢（けが）れし者にそそぎて其の肉体を潔むることを得ば、**

旧約ではそのようなことをやっていたが、

14 **まして永遠の御霊により瑕（きず）なくして己を神に献げ給いしキリストの血は、**

「キリストの血」という、その実存のことを言おうとしているときに、「永遠の御霊」ということをここで言っているわけです。

「ディア　プニューマトス　アイオニウー」（永遠の霊を通して）

と書いてある。キリストの実存は永遠の霊に、御霊によっていた。だから、彼には罪がもちろんなかったわけです。御霊の人だから。完全に御霊の人だから。

我らの良心を死にたる行為より潔めて活ける神に事えしめざらんや。

今度は、仕える方に持ってきてしまった。即ち、

「永遠の贖罪が終って、キリストの聖霊の実存を受けとると、そういったような実存に我々もされるではないか」

と。「死にたる行為」というのは、今までのは、律法的なのは「死にたる行為」です。今度は、「御霊によって贖罪されたから、キリストの御霊によって本当に活ける行為にまぁ我々の言葉でいうと、活ける実存に、

ならざるを得ない」

と、こういうことです。

15 **この故に彼は新しき契約の中保なり。**

そういうような媒介、新約の中保者。旧約と新約の橋を渡した、それが「中保」です。

「中保者」

ということはむしろまた、「土台」でもあるということ。キリストの土台ですよ。また、

「執り成し」

という言葉もあるね。執り成す者。聖霊もそうだ。執成しだとか中保だとか。要するに、

「橋を渡す人」

ですよ。けれども、この橋は単なる橋ではない。本当に土台みたいなものだ。

「転換をもたらす者」

と言ったっていい。悔い改めをもたらす者。

これ初の契約の下に犯したる咎を贖うべき死あるによりて、召されたる者に約束の永遠の嗣業を受けさせん為なり。

これは永遠の聖霊が来たから、聖霊が来ると、それが本当に神の国を継ぐ者、永遠の嗣業、神の国を嗣ぐ者になる。

「恵福なるかな、柔和なる者。その人は地を嗣がん」

という。即ち、永遠の嗣業を受けとるところの、それこそ聖民だ。聖なる民。聖国の民です。我々は既に聖国の民を保証されている。聖霊によって。聖霊を賜ったから。

無教会は聖霊を賜らないで、

「十字架、十字架」

と言っている。十字架のこっち側に留まっている。

「どうも、これは何だかまだ足りないな」

と思ったら、飛び込んできたらいいじゃないか、御霊の世界に。使徒たちの世界に。

「使徒行伝なんて、こんな凄いのは一体どういうわけだろう。私もそのような次元に入りたいな」

と、なぜ思わないんだろうね。

●讃美歌「聖書の扉に」

私は京都から帰ってきてから、聖霊に満ちているものだから、25日から毎日、讃美歌を作ってしまった。六つ作って、もう第30番までできている。全く不思議でしょうがない。あなた方は驚いてしまうよ。これは作りだしたら、大体、もう30分か1時間でできてしまう。

25番は、讃美歌の「目覚めよわが魂」（370番）の曲で歌える。これが11月25日の午後5時作。

A18「聖書の扉に」（1980.10.28）（讃美歌370「めさめよわが霊」）

1
聖書（みふみ）の扉に　体あたりし
平伏（ひれふ）し仰げば　門（かど）はひらき
われらは入りたり　神の国に
みどりの牧場に　泉辺（いずみべ）にぞ

2
聖書（みふみ）の現実（うつつ）は　神のドラマ
われらの集会（つどい）は　その中にて
棄身（すてみ）の心で　いのり叫び
み言（ことば）を喰（くら）い　み霊（たま）を飲む

3
祈りの場（にわ）にて　み霊臨み
めぐみとたまものゆたかなれば
ある人は異言（いげん）　あるは霊歌
病（やまい）もいやされ　み名を讃（たと）う

4
十字架されれば　み霊臨み
み言息吹（いぶ）くよ　あなうれしや
我らはいのちに　満ちあふれて
み名をたたえつつ　主にぞ生きる

5
御国のよろこび　つどいに満ち
歌声ゆたけく　響きわたる
別れをおしみて　去りがてなり
主のこの力を　いざや伝えん

●讃美歌「母の乳房を」

それから26番、これは538番の「すぎゆくこの世」の曲で。

A19「母の乳房を」（1980.11.26）（讃美歌538「すぎゆくこの世」）

1　母の乳房(ちぶさ)を　吸う兒(こ)の如く
　主のみ霊(たま)をば　飲みてぞ生くる
2　母がすべての　おさなごの如(ごと)
　わが身を全(また)く　主に投げ入れぬ
3　主のふところに　祈り入りてぞ
　み霊は臨み　力に溢(あふ)る
4　エン・クリストに 生くるわが身に
　み霊の力　みなぎりあふる
5　み霊の流れ　脈々たれば
　み民われらは　生命(いのち)の泉
6　み霊の火焔(ほのお)　炎々(えんえん)たれば
　何をかのぞまん　力ぞみつる
7　いざや我らは　燃ゆるみ霊を
　胸中(みぬち)に宿し　世の灯(ひ)とならん（灯を点(とも)さなん）

●讃美歌「信じ入れば」

それから、11月27日の午後10時作。これは京都のお話のあの文句が全部入っているんです。信入行転・愛抱捨身・望生光放。信・愛・望のこの三つの熟語を言いましたね。それが讃美歌の中に入っている。

A20「信じ入れば」（1980.11.27）（讃美歌514「よわきものよ」）

1　信じ入れば　み力を得(え)
　行(わざ)に転じ　人を助く
　主に在りて　力あり
　主のみ霊こそ　原始力ぞ！
2　主に愛され　抱(いだ)かれなば
　捨身(すてみ)の愛　われにみつる
　主に在りて　力あり
　主のみ霊こそ　原始力ぞ！
3　新天地の　望みに生く
　主の光を　四方(よも)に放つ
　主に在りて　力あり

主のみ霊こそ　原始力ぞ！

●讃美歌「地は形なく」

それから28番。これは大変だな。創世記のパラダイス・ロスト、楽園喪失を歌にしてしまった。全10節。これは「青葉茂れる桜井の」の曲でつくった。

A21「地は形なく」（1980.11.28）（奥山朝恭作曲「青葉茂れる桜井の」）

――楽園喪失の歌――

1
地は形なくただ空し　渕のおもてはただ闇し
神のみ霊は水面を　いとくすしくぞおおいける

2
神は叫べり「光あれ！」　ここにはじめて光あり
神のみ業のいやはてに　人を創造れり地をもて

3
神は霊気をその中に　吹き入れたれば生気あり
そのすがたこそみ像に　一如なりけれあなかしこ

4
空には鳥が飛びかわし　地には獣が這いまわる
されどアダムは独りにて　彼の相手はなかりけり
神は不憫に思いやり　アダムをじっと見つめけり
神はアダムに手を按きて　深き眠りにおとし入れ
肋骨を一つとり　これを女に創造たり

5
アダムはエバを見て言えり　「わが骨の骨　肉の肉」
生きとし生けるもののうち　エバのすがたに比うもの
ひとつもあらずエバの美は　神の芸術の傑作ぞ！
東西古今に謳わるる　美の極致こそ女体なれ

6
エデンの園はパラダイス　アダムとエバは思うまま
楽しきくらしをいとなめり　これをねたみて木陰より
サタンの使者美しき蛇　エバに近よりささやきぬ

7
「善きと悪しきを知るの樹を　汝ら喰わば開眼し
神の如くに成るべし」と　エバはたくみにだまされて
禁断の果をまず喰い　アダムも共に喰いけり

8
神の言に叛きたる　二人はここに罪を知り
木の下陰に身をかくし　神のみ前を恐れたり
ときに声あり「わがアダム　汝いずこに今在るや！」

9
神のみ言いと深し　さばきとあわれみひびきたり
さあれ二人は楽園を　追い出されて荒れし地に
汗を流して働きて　なりわいたつる道に就く

10 されどみ神は約しけり　「汝の裔（すえ）にメシヤ出で
蛇の首領（かしら）にうち勝ちて　救いの道をきりひらき
罪のゆるしを必ずや　与うべければ平安（やす）かれ！」と
どうしてこんな歌ができちゃったかな。これはまた痛快だよな。

●讃美歌「春は野べに」

今度は29番、これは11月29日午後10時作。

A22「春は野べに」（1980.11.29）（讃美歌515番「十字架の血に」）

1 春は野べに　夏は海に
秋は山の上（え）に　冬は雪に
主よ！われは　祈り入る
みふところこそ　愛の力！

2 出でて市（まち）に　入りて家に
見よいたるところ 主に見（ま）みゆる
主よ！われは　祈り入る
みふところこそ　愛の力！

3 聖書（みふみ）読めば　み声ひびき
聖言（みことば）のおくに　み霊息吹く
主よ！われは　祈り入る
みふところこそ　愛の力！

4 わが国民（くにたみ）　何処（いずこ）へいく
東西南北　否（いな）、霊界
主よ！われは　祈り入る
みふところこそ　愛の力！

5 キリスト教界　何処へいく
旧教新教　否（いな）、使徒らよ
主よ！われは　祈り入る
みふところこそ　愛の力！

●讃美歌「都の西の」

今度は30番、幕屋の四十周年の記念歌です。これは讃美歌のアルファでオメガの節でいきます。今朝の午前1時につくったんです。

B7「都の西の」（1980.11.30）（讃美歌461「主我を愛す」）
――武蔵野幕屋四十周年記念歌――

1
都の西の
幕屋を張りて
わが主イエス
われら生く
わが兄政美
十字架を負いて
わが主イエス
われら生く
その死の祈り
われはめさめて
わが主イエス
われら生く
無教会なる
十字架を仰ぎ
わが主イエス
われら生く
時は満ちた
友の手島と
わが主イエス
われら生く
み霊は降(くだ)り
われらは使徒の
わが主イエス
われら生く
三十年経(みそとせ)たる
昔を偲(しの)び
わが主イエス
われら生く
使徒らの次元
キリスト召団
わが主イエス
われら生く
東京・京都
埼玉・裾野

武さしの村に
四十歳(よそとせ)を経(へ)ぬ
救い主！
エン・クリスト！
北京の地にて
いのちをすてぬ
救い主！
エン・クリスト！
われをば打てり
主を信じたり
救い主！
エン・クリスト！
群に育ちて
みたまを知らず
救い主！
エン・クリスト！
阿蘇の山にて
主に叫びたり
救い主！
エン・クリスト！
バプテスマされ
信に帰りぬ
救い主！
エン・クリスト！
滝見荘にて
感慨無量！
救い主！
エン・クリスト！
あぁ慕はしや
進みゆくなり
救い主！
エン・クリスト！
大阪と奈良
増えよ召団

わが主イエス　救い主！
われら生く　エン・クリスト！
10　我らは聖名に　栄光（さかえ）を帰して
無的実存　貫き往かん
わが主イエス　救い主！
われら生く　エン・クリスト！

これも10番までつくったわけです。なんだか、毎日できてしまったんだよ、30番まで。いずれ来年は、50番までつくりますから。

●永遠の嗣業

それで、永遠の嗣業という。贖罪、聖霊、嗣業と、これが9章でちゃんともう素晴らしい神学的構造になっています。まぁ神学なんて言わなくたっていいですけれども。我々はこの永遠のゆずりを既に受けている。地上で、地上の生涯がどのように失敗であろうと、天国的成功をしていかなくてはいかんですよ、天国的成功を。人の目にはどうだっていい。それが本当に嗣業を賜っていること。聖霊の実存は必ずそのことをさせる。

あとそこのところには、似たようなことが書いてある。

19 **モーセ律法に循（したが）いて諸般（もろもろ）の誡命（いましめ）をすべての民に告げてのち、犢（こうし）と山羊との血また水と緋色の毛とヒソプとをとりて、書および凡ての民にそそぎて言う、**

これはそんなことをしたって、どうにもならんと。

20 **『これ神の汝らに命じたもう契約の血なり』と。** 21 **また同じく幕屋と祭のすべての器とに血をそそげり。**

これは旧約のことを言っているんですが、

22 **おおよそ律法によれば、万（よろず）のもの血をもて潔めらる。もし血を流すことなくば、赦さるることなし。**

「もし血を流すことなくば、赦さるることなし」

と。これは旧約ではそのようなわけで、動物の血を流しては罪の赦しということをやっていたが、ただ一回、キリストがゴルゴタの十字架という至聖所でもって血を流した。生命を与える。

「この血の生命を受けろ」

という、最後の晩餐の気持と贖罪と両方そこに出てます。けれども、その

「生命を受けろ」

ということはもう聖霊のことになる。

23 **この故に天に在るものに象（かたど）りたる物は此等にて潔められ、天にある物は此等に勝りたる犠牲（いけにえ）をもて潔めらるべきなり。** 24 **キリストは真（まこと）のものに象（かたど）れ**

る、手にて造りたる聖所に入らず、真の天に入りて今より我等のために神の前にあらわれ給う。

聖霊をもって現れたもう。また、再臨をもって現れたもうという、両方の気持が入っています。

25これ大祭司が年ごとに他の物の血をもて聖所に入るごとく、しばしばおのれを献ぐる為にあらず。26もし然らずば世の創(はじめ)より以来(このかた)しばしば苦難を受け給うべきなり。然れど今、世の季(すえ)にいたり、己を犠牲(いけにえ)となして罪を除かんために一たび現れたまえり。

さっき言った、この「一たび」という言葉です。

27一たび死ぬることと死にてのち審判を受くることとの人に定まりたる如く、28キリストも亦おおくの人の罪を負わんが為に一たび献げられ、復(また)罪を負うことなく、己を待ち望む者に再び現れて救を得させ給うべし。

再び現れて、聖霊をもって救を得させる。それから今度は、終局的な再臨によって完全に救の世界に入る。両方の気持が入ってます。聖書はみんなこの再臨を望んでの現実において書いているものですから。

「再臨」と言ったって、もうこの世界には再臨しないです、この地上には。キリストの再臨はもう新天新地に再臨される。預言者は出てくるよ。預言者は出てくるけれども、キリストの再臨はもう終末の時です。

●キリストが私を捉えた

これがヘブル書9章の大事な構造ですから。そして、旧約の宗教を完全に彼は身をもって成就してしまった。不思議な言葉ですね、

「永遠の贖罪、永遠の聖霊、永遠の嗣業」

とは決定的な言葉です。

だから、自分の信仰だとか、自分の実存だとか、「わが」なんていうのはいらない。「主の」です。「主の信」、「主の実存」を受けとっていくだけです。

もちろん、我々は鍛えられなくてはなりません。鍛えられなくてはなりませんけれども、自ら鍛えてそうなるのではない。それは主の実存を受けとると、そうすると、鍛えられるんです。「鍛えられる」という受身の形になってくると、逆に力が出る。だから、私はあなた方を鍛えますよ。けれども、それはいわゆる道徳的な鍛えというわけではないですから、間違えないようにしてください。

パウロがピリピ書3章12節で、

「12**われ既に取れり、既に全うせられたりと言うにあらず、唯これを捉(とら)えんとて追求(おいもと)む。キリストは之を得させんとて我を捉えたまえり。**」

「キリストが私を捉えた」

という、この完了のところは忘れては困る。キリストにもう捕まっているんだと。捕まっているから、捉えられているから、

13兄弟よ、われは既に捉えたりと思わず、唯この一事を務む、即ち後のものを忘れ、前のものに向かいて励み、14標準(めあて)を指して進み、神のキリスト・イエスに由りて上に召したもう召(めし)にかかわる褒美を得んとて之を追求(おいもと)む。」（ピリピ３・12～14）

という。パウロというやつは勇ましいやつだからね。けれども、

「キリストに捉えられたから、いよいよもって追求する」

というんです。捉えられないで追求したって、これは理想主義になってしまって、くたびれてしまう。キリストに捉えられたという実力の土台があって、原始力が来ているんだ。

「私は既に捉えられて原始力をいただいています。だから、いよいよ求めざるを得ません。追求せざるを得ません」

と。地上では、我々はどうせ不完全なものだからね。地上では追求して追求し終わらないんだ。これが全うされるのは、天界に行ってからのはなし。こっちでは三日月だか半月だか知らないけれども。ただし、これは既に捉えられているから満月性を持っている。完全性を頂いている。現実は完全でないけれども、完全性が中に入っている。だから、必ず完全なものに円現するというわけです。

●唯一性

それがキリストの「恵み」です。そして、恵みから現れてくるいろいろなものが「賜物」です。キリストそのものが恵みですから、御霊そのものが。御霊そのものが「カリス」（恵み）。御霊の力はいろいろに展開する。それが「カリスマ」（賜物）です。

ところが、カリスを本当に受けとらないから、カリスマがちっとも現れないんだ、無教会なんていうものは。まぁ「ちっとも」とは言わないけれども、それは学問的には現れているでしょう。けれども、果して聖霊による学問だかは知りませんよ。頭がいいから進んでいるようなところがだいぶあるようだ。そうすると、結局それは自力的な角度になる。信仰がくたびれる。パリサイになる。

まぁそういうことで、３章はじっくりお読みください。この、

「ただ一回」

ということが非常にまた大事なことです。我々の集会もいつもこれ、「ただ一回」的なんです。非連続の連続なんです、毎回が。だから、

「もう万難を排して集会に来なさいよ」

というのは、ただ一回限りの集会を毎回やっているわけだ。何か来るんです、もう言葉以

上のものが。そういう意味で、聞いているうちに、ちょっと調子が悪かったのが治ってしまったということになる。

一日一日をただ一日として、一日を即ち一生として――これは内村先生の言葉だけれども――一日を本当に一生というような気合で生きていれば、いつぶっ仆れても、

「アーメン、ハレルヤ！」

と、未完成の完成と、そういうことです。だから、唯一性という、ただ一回性というものは、

「ただ一回」

というのは大事な言葉だよ。さっき言った、「ハパックス」。あるいは、「エファパックス」という妙な言葉だけれども。

「ヌール　アイマール、ニッヒッツ　ヴィーダー」（ただ一回だけ、再びはない）

という。「会議は踊る」という映画の歌にあるね。

「人生の春はただ一回花咲き、再びこない」

という。私なんかは、

「人生の冬」

だ。今度はその次は、芽を吹き出せば、向う側だ、春は。だけれども、私の冬は長いよ。長くなくては困るよ、私は。まだ仕事があるんだから。あと20年くらい冬が続かないと。それで向う側に行ったときに、

「あぁ、天界の春はなんと素晴らしいな」

と、こう言いたいわけです。おしまい。

私の作った讃美歌を三曲歌います。

●讃美歌「羔の血を」

A15「羔の血を」（1980.10.16）（田中穂積作曲「美しの天然」）

1　羔（こひつじ）の血を　身に浴びて
あがなわれたる　白き群
苦難（くるしみ）経たる　生涯（いのち）ゆえ
栄光（さかえ）ゆたけき　御座（みざ）の許（もと）

2　神の幕屋（まくや）の　張られたる
その天然の　霊泉に
渇（かわ）きを知らぬ　永遠（とこしえ）の
生活（いのち）たのしむ　パラダイス

3　数えつくせぬ　国民（くにたみ）の
星と散らばる　幕屋かな
類は相呼び　集りて

主のエクレシヤ　ここに成る
4 我らも地にて　聖名ゆえに
十字架を負いて　生き貫かん
み霊の光　身に浴びて
主のみ生活を　身証せん

●讃美歌「われはシャロンに」

A12「われはシャロンに」(1979.12.20)（中山晋平作曲「カチューシャ可愛いや」）

――雅歌のこころ――

1 「われはシャロン　花咲く野バラ
わが牧人　馳せ来たれ！
我を抱きて　接吻たもれ」(f.)
2 「汝れの鳩胸　み霊にみちて
汝れの息吹きは　天つ風
汝れが唇　滴る蜜よ」(m.)
3 「神に我が魂　一如となれり
われらもまこと　一つなり
いざや野山の　牧場に住かん」(m.)
4 われをみ胸に　印となせよ
愛の契りは　とこしえに
死をも突きぬけ　焔と燃ゆる！」(f.)

●讃美歌「わが主キリストは」

A7「わが主キリストは」(1979.12.27)（讃美歌239「さまよう人々」）

1 わが主キリストは　わが牧人
若草の野辺に　われを臥させ
憩いの水汀に　伴れゆき給う
これこそ聖国の　すがたなれや
2 たとい死の陰の　谷を住くも
われにおそれなし　汝れは我れと
共に在し給う　汝れの情け
汝がみ霊こそは　わが生命ぞ
3 わが主はわがため　仇敵の前に
み霊の油を　そそぎ給う

敵をも愛する　心こそは
聖霊より出づる　力なれや
４
恩恵と真理は　聖霊なれば
われらの中にぞ　入り来れる
これぞ永遠の　いのちなれば
われらは聖霊の　幕屋たれや

●祈り

主さま。今日は、ヘブル書第9章、極めて大事なところを兄弟姉妹たちと親しく、御霊に導かれ、御言に与り、感謝いたします。

京都の集会、あのようにあなたを慕って、東西南北から兄弟姉妹がやって参りまして、みなそれぞれ掛け替えのないご恩寵にあずかり聖名を讃えて散じました。感謝いたします。

どうぞ、そこここにみな散らばっているところの兄弟姉妹、いよいよクリスマスに向かって力強く今年の最後を歩み続けることができますように願い奉ります。

今、風邪がはやっています。しかし、いかなる時にも聖名を呼び、あなたの根源の生命にあずかって、これにぶつかって行くことができますようにお願いいたします。必ずそのすべての経験が働いて、聖名のゆえであることを悟っていくことができることを感謝いたします。

各幕屋、各召団の人たちが、この聖日を一回一回、真剣勝負でこれに立ち向かい、前進また前進していくことができますように。今、私たちの使命は重大でありますから、どうぞ、聖名にあってそのことを力強く受けとっていくことができますように、切に願い奉ります。

私たちにとって、聖書はただ一つの書です。

「ただ一回」

と今日は学びましたが、本当にこれはただ一つの書でありまして、私たちには、この聖書を抜いては万巻の書も意味がありません。どうぞ、この聖書が本当に私たちに化体することができますように。我々自身が活ける聖書になることができますように、願い奉ります。

今、尽くしませんが、兄弟姉妹たちの胸にあるそれぞれの感謝と願いと共に、主イエス・キリストの聖名により捧げ奉る。アーメン。